

〈書評〉

真鍋 祐子 著「光州事件で読む現代韓国」

平凡社, 2000年, 265頁, 2500円.

飯村 友紀

本書は、前作『烈士の誕生』で韓国社会運動の研究に新境地を開いた著者の最近作である。前作から約3年を経て上梓された本書において、著者はヴィクター・ターナーの「コミュニタス」「社会的ドラマ」、フロイト「悲哀とメランコリー」などの主要な理論的枠組みの一部、そして「運動圏」「制度圏」「死の意味付け」の類型化といった方法論の一部を前作と共有しつつ、「光州事件」「金大中」を新たなキーワードとして「政治は宗教性と、宗教は政治性と、ともに不可分に結」びついた「韓国史の陰の部分」すなわち、政治学的分析では解明できない韓国人（特に全羅道地域）の「宗教的、政治的な心性（メンタリティ）」（11頁）に注目し、考察を加えている。以下、本書の構成に即して概括してみたい。

まずI章では、マクロの局面から問題設定が行われる。すなわち、著者は現代韓国社会における「体制—反体制」の対立構造をなす要因として、李朝以来の宗教伝統とも言うべき「祖上神—冤魂」、南北分断以来の「(反共国家としての) 国民国家ナショナリズム—民族ナショナリズム」、そして1960年代以降、朴正熙政権の「上からの革命」によって顕著となった「慶尚道—全羅道」を挙げ、これらと、他地域にはない光州の特殊性、すなわち甲午農民運動や光州学生運動に代表される「抵抗の伝統」、非業の死を遂げた祖先たちを「祖上神」として祀りあげ、自らの血脈を価値付けようとしてきた歴史的経験が広く住民に共有されていたこと、さらには「韓国の第三世界」と称された経済格差、そしてそれらのイメージが「金大中」に投影され、「メシアニズム的な宗教性」が付与されたことが相俟って「地域感情に由来する反対的な心情が蔓延」する「光州圏」を形成し、光州事件発生条件を醸成したと指摘する。そして、朴正熙

のクーデター、光州事件、金大中政権の誕生に至るプロセスに「社会的ドラマ」を適用し、「国家」レベルでの「アカ」「暴徒」、「地域」レベルでの「背逆」「祀られぬ鬼神」、そして「家族」レベルでの「冤魂」という、犠牲者にはられた数々のレッテルを「英霊」「烈士」「祖上神」へと価値転換（恨解き）させようとする思考がその原動力になったと指摘するのである。

続くⅡ章は、主にミクロの局面からの考察に充てられる。ここで描かれるのは、光州事件を契機に韓国の民衆運動が「親米的、反共イデオロギー的な『大韓民国』」に代えて「極めて民族主義的な『統一祖国』」を指向するようになるのと機を同じくして、光州は「冷戦構造下での分断状況の矛盾」の象徴とされ、光州事件の犠牲者には「三八度線で切り裂かれた民族そのものの瀕死の姿」が投影されるに至り、斯様な現象と、事件で犠牲となった非業の死者に対する慰撫として個別的・局地的に行われてきた共同祭祀（あるいは体制側と対峙する弔いデモ）とが結合し、光州「巡礼」が発生するに至った過程である。また、そこに通底するのは前述の「冤魂」の「恨解き」、そして「孝の生命論」に根ざした儒教社会の「祖国」から「祖先」「親」「私」そして「子孫」にまで連なる「民族」の血脈である、との指摘もなされる。光州に対する「コミュニタス」の適用、巡礼のモデルコースと「場」の分析、巡礼を通じた「光州事件の犠牲者、八〇年代以降の死者、巡礼者」の渾然一体化の構造分析など、本章は前作で提示された問題意識・方法論がもっとも色濃く反映された部分といえよう。

そしてⅢ章では、光州巡礼の主体であり、光州事件を題材とする「五月文化」の語り部であるだけでなく、今や社会の中堅層となりつつある「五・一八世代」に関する考察であり、いわばメゾの局面からの分析である。著者はここで上の世代（「四・一九世代」）・下の世代（「X世代」）との比較を通じ、五・一八世代の特徴として政治的関心の高さ、急進性、光州事件への肯定的態度を挙げ、それが前述の「韓国民衆運動におけるパラダイム・シフト」に基づく可能性を指摘する。次いで、「恨解き」を願う遺族の情念は、「癒されぬ死者の思いに心をかたむけ、その細くかよわき声に耳を澄まし、聞きとどけた言葉を対抗的な語り（カウンター・ディスコース）として表出」させる「文化的な装置」としての民衆詩に代表される「五月文化」を介して政治的スローガンへと変容され、それが「民衆世界とイデオロギー」「全羅道とかの地」を結合させたと分析す



る。そして、五・一八世代のマスメディアへの進出と、1994年の光州「聖域化」宣言とによって、五月文化はついに「光州圏」「運動圏」を超えて「制度圏」に到達し、光州は巡礼という直接的体験によって共有される「共感の共同体」から、視覚的・聴覚的に表現される世界を通じた「想像の共同体」としてより広汎な人口に膾炙されるに至った、と結論付けている。

本書の特徴としては、以下の3点が挙げられよう。

第一は、「現実社会を構成している人びとの心のひだを、そして政治変動のなかに隠された無数の人びとの心理的起動力（エトス）を知りたいと願うがゆえに、敢えて「政治学的分析に目をつぶり」、「想像力を喚起」し、「共感の共同体にわけいって、そこからなんらかの意味や情緒を付度し、感得しながら、ひとつずつ自己の内面に刻印していった」と語る著者の叙述スタイルである。無論、このことが客観性を捨象した独り善がりな叙述を意味するものではないことは言を俟たない。民衆運動の高まりと、そこに通底する「恨解き」へのエネルギーを描写しつつも、メディアが煽る地域対立の「自明性」に欺かれぬ多くの人びと（24頁）、「両班政治家」たちの政策スローガンの争いを茶化しつつ、自分たちのしたたかさ、食うための食欲さを競い合う民衆の姿（31～32頁）、光州における金大中の得票率（97.3%）を「北韓の共産党と同じさ」と振り返る光州のタクシー運転手の述懐（245頁）などを活写する本書が、稀有なバランス感覚に裏打ちされていることは一読すれば直ちに明らかになる。

第二が、特にフィールドワークに際して遺憾なく発揮される旺盛な行動力である。遺族会の会長から「烈士」の遺族、「五・一八世代」の文化人、はてはタクシー運転手や相乗りになった学生、偶然著者に声をかけた街頭インタビューに至るまで、その取材対象は止まるところを知らない。この部分はまさに著者の独壇場であり、真骨頂であろう。

そして第三に挙げられるのが、本書自体が、（おそらくは著者のライフ・ワークとなるであろう）壮大な「巡礼行」の「序章」を構成している点である。本書の結論部分において、著者は今後の民衆運動において「統一」が主要な争点となることを予測し、「白頭山」を新たなキーワードとする新たな「宴」、すなわち「統一祖国へと向かう巡礼の旅路」（246頁）の出現を確信する。既に本書の刊行以降、著者は白頭山観光をテーマとする論考を相次いで発表している。

当然、本書の続編を視野に入れての行動であろう。前作に圧倒され、本作に魅了された「研究者見習い」の一人として、またしても提示されるであろう高い「ハードル」に戦きつつも、今から楽しみである。

ところで、本書においては、金大中政権の成立と、慶尚道に対する全羅道の優位の確立とによって「光州圏」の「恨」は解かれた、とされている。しかし、「金大中後」の「光州圏」の動向は、今年12月に迫った大統領選挙の結果如何に関わらず、なお興味深いトピックたりえよう。また、著者自身も語るように、韓国では近年「光州事件とは、八〇年代とは何だったのかをふり返り、追求する動き」（263頁）が活発化しており、斯様な動きをも視野に入れた韓国社会運動の論究の重要性は今後とも増す一方ではないだろうか。著者の新たな分野の開拓とともに、この分野における次回作にも（あるいは両者の統合が企図されるのであろうか？）期待したい。

#### 〈参考文献〉

- ・真鍋祐子『烈士の誕生—韓国の民衆運動における「恨」の力学』平河出版社、1997年
- ・———「現代韓国のく「巡礼」と民族主義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第91集、2001年3月
- ・———「韓国人のエスニシティ形成と白頭山「巡礼」」『現代韓国朝鮮研究』創刊号、2001年11月

(いいむら ともき／筑波大学大学院)